

総合教育研究センター
学生向け情報誌

クレードル 23号

CRADLE

Center for Research And Development of
Liberal arts Education
23rd issue

教員採用試験 合格体験記

出会いに導かれ p.2

山村 早輝(文学部歴史文化学科 4 回生)

8年越しの夢を叶えるために p.3

井手谷 彩永(体育学部体育学科 4 回生)



総合教育研究センターの新しい仲間です

はじめまして p.4

須永 哲思(総合教育研究センター)

暑い中、みんながんばりましたよ

出現スタードーム！！—子どもたちも一緒に天理 SDGs— p.6

竹村 景生(総合教育研究センター)

ドイツから第2弾



Spielplatz p.14

箱田 徹(総合教育研究センター)

へんし〜ん

心の健康法18「変わること」をたのしんでいきましょう！ p.16

仲 淳(総合教育研究センター)

出会いに導かれ

文学部歴史文化学科考古学・民俗学研究コース 4 回生 山村早輝

教員を目指したきっかけ

私は天理大学に入学した時は、社会科の教員になるか博物館の学芸員になるのか進路を迷っていました。教員になることを本格的に目指すようになったのは、3 回生の時にスクールサポーターとして実際に学校現場で活動したことがきっかけでした。サポーターとしての活動は、授業に入ってタブレット端末の操作や黒板のノートの書き取りなどに困っている生徒に対して学習支援をしました。これらの活動を通して、日々様々な出来事を経験しながら成長する子どもたちを目にし、教員として生徒と直接関わることにやりがいを感じ、絶対に採用試験に合格して教員になりたいと思うようになりました。また、先生方がどのように生徒に関わっているのか間近で学べる機会でもあるため、ここで得た貴重な経験は採用試験の面接で教科指導や生徒指導に関する質問をされた時にとっても役立ちました。

教員採用試験合格までの道のり

私は 3 回生の夏頃に教員採用試験の勉強を開始しました。まず、中学生時代の恩師や天理大学の教職課程の先生に採用試験の対策方法を教えてもらい、先生方から勧めていただいた問題集を解くことから始めました。初めて、受験する奈良県の過去問題集を解いた時は、正答率が 3 割ほどで地理の基本問題であるケッペンの気候区分すらも分からない状態でした。そんな状態からスタートした為、勉強はもう一度大学受験をするぐらいのつもりで必死に取り組みました。勉強をする時は一人ではなく、同じく教員を目指す大学の仲間とお互いに問題を出し合ったり、情報を共有しながら勉強していました。なかなか模試の点数が上がらずに勉強に行き詰まっていた時に、一緒に頑張る仲間がいてくれたことはとても心強かったです。

4 回生の春からは、総合教育研究センターで上田先生はじめ多くの先生方にご指導いただき、筆記試験対策に加え集団討議や個人面接の練習も行いました。

その中で指導法の授業を担当してくださっていた植松先生から帝塚山大学で行っている採用試験対策の勉強会に誘っていただき、そこに参加していた小学校の教員を目指す方々（学生・講師）との出会いも私にとって大変勉強になりました。参加する前までは自分自身が目指す中学校の先生の視点だけでしか考えていませんでしたが、参加して小



中学校の先生の視点を学び、小学校から中学校への学びの接続が大事であることが分かり、教育を多角的な視点で捉えることができるようになりました。これらの経験は、今後教員として活かしていきたいです。

最後に、今までご指導、応援してくださった先生方、一緒に頑張ってきた仲間、支えてくれた家族に感謝しています。

「8年越しの夢を叶えるために」

体育学部体育学科 4 回生 井手谷彩永

教員採用試験の対策は今までで一番努力しました。中学から目指していた保健体育の先生になりたい、現役合格をしたい、ただその一心で、勉強漬けの日々でした。

大学 2 回生の 1 月から 1 日 5 分程度の勉強から始め、早い時期からコツコツと知識を蓄えていきました。筆記試験の対策をしていて、何より大切なのが、楽しんで勉強をすることだと思います。私は、採用試験の 2 か月前に挑戦したことがあります。それは、47 都道府県すべての過去問を解くことです。真っ白の日本地図に、やった都道府県に色を塗っていくと、「近畿地方制覇した!」「東北地方制覇した!」と、日本地図がどんどん染まっていくことに達成感を覚えました。試験勉強は毎日同じことの繰り返しで、しんどいこともたくさんありますが、自分なりに楽しんで取り組むことで、勉強に対してのやる気が上がります。



そして、私の中で革命が起きたのは、3 回生の 11 月ころから参加した、スクールサポートのボランティアへ行ったことです。ボランティアで、実際に教育現場に立って、生徒たちと触れ合うことで、より一層教員になりたい気持ちが増し、勉強のモチベーションが格段にアップしました。また、ボラン

ティア先の先生方から採用試験のアドバイスやおすすめの参考書を教えていただいたり、大学の先生を紹介していただくことができました。そこで、紹介していただいた先生が、総合教育研究センターの上田先生です。

教員採用試験に合格することができたのは、決して私一人の力ではないと心から思っています。試験に向けてたくさんアドバイスをしてくれた先生方、教員に向けて共に努力した仲間、いつもそばで支えてくれた家族がいてくれたからこそ合格です。

「現役合格はかなり難しい」と何度も言われました。しかし、少しの可能性を信じて、仲間と共に高め合ったり、泣いたり笑ったりしながら努力し続けて本当に良かったと思います。

だからこそ、4 月からは保健体育の教員として、身体を動かすことの大切さや楽しさを伝えながら、子どもたちの可能性を広げられるように頑張っていきたいです。



はじめまして

資料紹介：小学校社会科教科書『新版 あかるい社会』（1955 年）

総合教育研究センター 須永 哲思

2022 年 4 月に天理大学人間学部総合教育研究センターに着任した、須永哲思（すながさとし）と申します。1986 年 8 月生まれ、東京都足立区出身、獅子座の寅年です。着任したばかりでまだ慣れていないことばかりなのですが、頑張ります！

9 年間に在籍した大学院時代には、近現代日本教育史、特に 1950 年代の社会科について研究していました。研究を深めていく中で出会ったのが、小学校社会科教科書『あかるい社会』（「あかるい社会」編集委員会編著、新版、中教出版、1955 年、以下『新版 あかるい社会』）です。



図1：『新版 あかるい社会』表紙（3年上・下巻）

この教科書は、1955 年 8 月に当時の政府与党から 6 年上巻の歴史叙述が「偏向」していると政治的に攻撃された（「うれうべき教科書の問題」）、4 種類の教科書のうちの 1 つとして知られています。ただ、筆者が面白いと感じるのは、むしろ中学年（3-4 年）の教科書記述です。のちの家永教科書裁判の前史として歴史的な記述のみが注目されてきた『新版 あかるい社会』ですが、それだけではこの教科書の面白さや深みは見えてこないですし、この教科書が絶版にされたことの不当性や歴史的意義についても、考えることにはならないと思います。

まず、『新版 あかるい社会』の大きな特徴の一つは、地域の固有名詞にこだわる、という点にあります。3 年上巻・巻末の「先生がたと父兄の方へ」では、「実在の村や町の具体的なすがたをよみとることが、じぶんの村や町を見ていく手がかりになると考えて、この社会科教科書では、3 年以上は虚構をやめました」とされています。この教科書に本当に「虚構」がないのかという点は別に考える必要があるのですが、架空の地域名は

出さないという地域性への強いこだわりを感じます。

実際に実在する地域を取り上げた教科書記述の一つに、「えひめ県すみの町」の「べっし銅山」（愛媛県新居浜市角野町の別子銅山）があります。ここでは、「ぼくのうち」として銅山に勤める家族たちが暮らす「十けんながや」（共同水場での「おかあさん」たちの洗濯）、「こくりょう川」「えんとつ山」（精錬場跡地）や新居浜市の町並み、「ぼくのおとうさん」と同じように電車で通勤する鉱山労働者の「おじさんたち」の姿、などが記述されています。架空のある県ある市のある鉱山の話ではなく、愛媛県新居浜市の別子銅山という実在する地域に暮らす「ぼく」の目線から、1950年代の鉱山の暮らしが描かれています。



図2：『新版 あかるい社会』表紙（3年上、95-99頁）

教科書記述における地域性や個別具体性へのこだわりは、戦後に復興・隆盛した生活綴方運動の影響を受けたものだったと考えられます。以下は、『綴方風土記 第6巻 瀬戸内四国篇』（下中弥三郎編集兼発行、平凡社、1953年8月）という、日本全国から集めた子どもたちの作文を掲載しそれに解説文や写真・図解を付した社会科用副教材です。

ぼくの家の父は、銅山につとめています。ぼくたちの住んでいる家は、長屋になっていて、長屋に住んでいる人たちは、みな銅山につとめています。だから友だちがたくさんいます。この長屋は、十けんずつ横に並んでいて、その十けんあいだに水場があって、よく母がせんたくをします。十列あるので、ぜんぶで百けんになっています。百けんずつになっているのを、一区、二区、三区とって、六区まであります。ぼくたちが住んでいる一区には、九十けんしかありません。それに天井が低いので、台風などがくると、土がポロポロと落ちてきて、気味が悪いのです。けれども、ぼくの下の子には、天井が低くありません。風呂は、六区の上には、共同風呂があります。一区のすぐ横には、土手があって、土手の上に道がついています。土手の横には、国領川が流れています。ぼくの家から、えんとつ山が見えます。どうしてえんとつ山とこの山とが兄に聞くと、むかしは、この山に銅をどかすところがあり、銅山からほりだされた鉱石がどかされていたので、そのときのえんとつがまだ残っている山に立っているの、えんとつ山というのだそうです。友だちがえんとつの上に立っている、ひらい針が金だといっていました。ぼくたちの学校は、役場の上にあります。べんきょうをしていますが、ゴーと電車が通ります。この電車も前は汽車だったのが、電車が通るようになりまし。父もこの電車で銅山に行きます。父は、よくかたや足をもちといます。仕事から帰るとすぐ、こはんをたべてねます。

この角野町のとなりは、中津町や、真川町などがあります。えんとつ山から新居浜のほうを見ると、えんとつが無数に並んでいます。その向こうには、瀬戸内海が見えて船が入入っています。もとは、この別子銅山が発達してきたので、こんな大きな市になったのだと思います。えい画などを、夜、見に行つて帰りしななど、ランプをさげた、仕事行きさんのすがたなどが見つけられます。

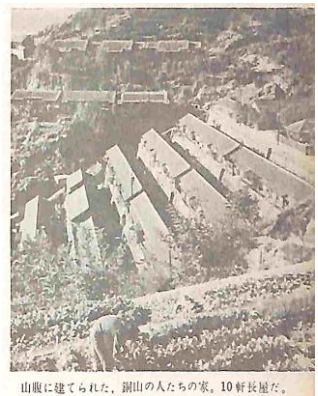


図3：『綴方風土記 第6巻 瀬戸内四国篇』（234-235頁）

図3を図2と比較すると、10軒長屋の写真や国領川・「えんとつ山」、共同水場での洗濯、「仕事行きさん」（通勤する鉱山労働者の姿）などが、ほとんど一致していることが分かります。つまり、角野小学校6年生の子どもたちの作文を、『あかるい社会』の教科書記述は地の文章としてほぼそのまま採用していた、ということになります。子どもの作文が社会科教科書になるということをめぐっては、評価も批判も様々にあり得ますが、戦前とも現代とも異なる「1950年代らしさ」がよく現れていると思います。

今日からみれば過去の教科書は無用の長物（現行の学習指導要領にそくしておらず使

えない)ですが、当時の教育を考える上で重要な資料たり得ます。教育を歴史的に考えるということを通して、教職教育や学術研究を今後も頑張っていきたいと思っています。今後とも、よろしくお願いいたします。

出現スタードーム！！

—こどもたちも一緒に天理 SDGs—

総合教育研究センター 竹村 景生

2022年度の森に生きるは、コロナ禍3年目に入りSDGsやキャリア教育を意識するプログラムへと転換することになった。人に学び、風土を識り、現地でなかまと汗を流して協働することを通して、「自分には何ができるのだろうか？」を考える機会となるような授業を構想した。そして受講生の田村千賀さんの感想文を目にしたとき、私たちの思いを学生たちは確実に受けとめてくれていたことに少し安堵したのである。

「今後のキャリア形成については、椅子に座って仕事をしたり、飲食店に勤めたり以外にも、森の中での職業もあり、自分にはまだまだ選択肢があるということを知り、これからの可能性に期待を持つことができました。また、あんまり堅苦しいことを考えず、周りの人と協力し、周りの人のために活動し、喜んでいただき、それで自分も幸せになれるような仕事は何なのか、人生とは何なのかを今後の勉強と組み合わせて考えていこうとおもいました。(田村千賀)」
(竹村景生)

8月8日 桜井市鹿路 夢咲花 間伐実習



「それぞれの道具の大切さや、その行動にどのような意味があるのかがわかった」

今回の桜井市での間伐の実習にて、間伐の大変さとその間伐した木で何ができるかについてや、木の特性などを学びました。

私は、小さな頃から山に入って木を伐ったりしていましたが紐で引っ張ったりナタで木を削ってどちらの方向へ倒すなどを考えたりや、子供だったためチェーンソーなどの機械を使ったりすることがなく、常にノコギリで根性で行っていましたが、今回の間伐の作業でそれぞれの道具の大切さやその行動にどのような意味があるのかについてわかり、もしこれから山に入って木を伐ったりする時には、しっかり今回受けたことを思い出しながら対応していきたいと思いました。また、木のどの部分がどうゆう木目になっ

ているかも学び、その木目により使い道も変わるということがわかりました。今回は、とても実になる実習だと思いました。枝松 春理

「何度か試していくうちにわかっていき、だんだんと楽しくなっていった」



これまで、木を伐ったり竹を伐ったりしたことはあったが、初めて木を伐り倒すということを体験した。初めはどれくらいのこぎりを入れたり、角度をつけて伐ったりすれば良いかわからないことが多かったが、何度か試していくうちにわかっていき、だんだんと楽しくなっていった。また、どの向きに倒すか、自分で考えるのも必要で、友達と二人で協力して太めの木を伐ることも楽しかった。初めは伐り込みが甘く、ロープを使って引っ張っても全然木が倒れそうになかった。だが、もっと深く伐り込みをいれると倒すことができた。また、その友達が木にロープをひっかけるのがとても上手で、力いっぱい引っ張ってくれたおかげで倒すことができた。ボールペンづくりでは色々な形の木から、自分の好みの形のものを選び、やすりで磨いていくというものであった。一度削り始めるとこだわってしまいどのタイミングで削り終わればよいかわからなくなってしまった。だが、最終的には自分が気に入るように削ることができ、満足できた。大朋 祥乃

「このカッコいい技術を絶やすことなく、若者が受け継いでいかなければならないと思いました」

夢咲花での実習で、初めて間伐作業を体験して林業の大変さを身をもって知ることができたと感じます。木を倒すために、口を作って木が倒れる向きを調整したり、山の中に入ってどの木を残して間伐を行うかなどの技術を初めて知って、その技術のすごさに圧倒されました。また、私たちが山に入ると慣れていないため、少しの斜面を移動することも大変だし、虫なども多くてなかなか前に進めないこともたくさんありました。

しかし、私たちよりも何十歳も年上の方がどんどん前に進み、作業を行っている姿はとてもカッコいいと思いました。そして、このカッコいい技術を絶やすことなく、若者が受け継いでいかなければならないと思いました。実習中もよく最近人手が足りないとおっしゃっていて、どれだけ一つの作業が大変で、労力がかかることなのかということ考えると胸が痛くなりました。自分にできることは、無いに等しいですが、何か力になりたいと思いました。また、社会がSDGsを掲げるのであれば、政府などは、このような自然との共存にも様々な取り組みを行うことはできないのだろうかと感じました。

自然木のボールペンは、木本来の素材の良さを最大限に活かしていてとても素敵なものができました。このように、素材を生かすことでもっと様々なものに活用することができるのではないかと思います。東野 恵佳



8月23日 スタードーム実習 第1日目 東乗鞍古墳 杣之内キャンパス



「数時間前まで生えていた竹で小さなお家ができただけでとても感慨深かった」

この日は、東乗鞍古墳での竹の伐採・スタードームの作成を体験しました。竹の伐採は、木よりは簡単な印象でした。(中が空洞だから?) 実際に自分で伐り出すことをさせていただきました。伐り出した前後で地面に届く光が、明らかに違い、本当に伐ったんだと感激したことはとても印象的です。その後は、搬出をして六等分に。この作業がとても重労働です。六等分にするときには、専用の器具を用いて行います。ネットなどでは、竹割り器と調べると出てきました。扱い方は非常に古典的な器具だと思いました。

その作業が終わると竹は綺麗に六等分に。最新のものだけが優れているという考えは浅はかなのかもしれないと気づいた瞬間でもありました。キャンパスに戻り、いざスタードームの作成へ。小さな模型と共に説明がありますが、いまいち理解できませんでした。しかし、実際にやってみるとパズルのように組み合わせていくことが面白く、夢中になっていました。そして実際にドーム型になったときには、数時間前まで生えていた竹で小さなお家ができただけでとても感慨深かったです。古川 雄大

「いつかは自然を利用して色々なものを作りたいと思わされたし、アートとかも作れたらいいなと思いました」

スタードーム 1 日目は朝から竹を伐採しに行きました。施設の人から話を聞き、それから実習がスタートしました。やっぱり竹を伐るのも苦労しました。1 人の力では絶対にできないし、みんなの協力があって竹を伐ったり、引っ張ったりできました。みんなで協力することで、会話やチーム力がありとてもいいとおもいました。自分はしんどくて、竹を伐採するだけになってしまったんですが、グループに流れてくる写真とかを見ていると竹で綺麗なアートが作れるのはとてもすごいと思いました。自分もいつかは自然を利用して色々なものを作りたいと思わされたし、アートとかも作れたらいいなと思



ました。この授業で自然はとても素晴らしい物だと気づかせていただきました。この貴重な体験を将来活かしていきたいし、また体験していない人にも体験してもらって素晴らしさを感じてほしいと思いました。最後までいられなかったのは残念で悔しかったけど、竹を伐採できたのはとてもいい経験ができたと思いました。土井 翼

「想像していたよりも案外アナログなやり方で面白かった」

竹林に入って、伐採作業を行いました。前回の木を伐るのと違って、竹は中が空洞になっている分、木を伐るよりも早く伐れたような気がしました。竹林は、前回の山よりも蚊など虫が多くて、作業をするにも虫が気になって集中しにくかったです。しかし、慣れている人はそんなことを一切気にしないで作業を行っていて、さすがだなと思えたのと、自分の未熟さを感じました。



作業でとても面白いと思ったことは、竹を割ることです。様々な機械が発明されている中、想像していたよりも案外アナログなやり方で面白かったです。そして、たいそうな機械を使わなくても竹がきれいに割れていくことが、すごいと思いました。



本番で作るスタードームよりも小さいサイズのスタードームを作りました。竹のしなるという特性を生かして、しなり具合に折れてしまうのではないかと思うくらいでした。

しかし、折れることなく普段では味わうことができないような、心地の良い異空間が出来上がりました。東野 恵佳

「初めてスタードームの存在を知り作ってみて竹の新しい利用価値を見つけました」

親里ホッケー場の奥にある東乗鞍古墳の竹林で竹を伐りスタードームの素材を作りました。急斜面を登り竹林に入りノコギリで伐りました。ノコギリで伐り込みを入れてからロープで結び引っ張って竹を倒しました。倒したあと6メートルごとに伐り分けて下へ運び出しました。竹一本引きずって運び思ったより重くて大変でした。

運び出してから竹を6等分するため断面に金属の物体を押し当て壁に向かってハンマーで叩きました。このハンマーを叩く作業がとてもしんどかったです。綺麗に6等分できて嬉しかったです。6等分した細い竹にドリルで穴を開けて印をつけました。

トラックに積み込み大学で組み立てました。最初の編み込む作業が複雑で全然頭が追いつきませんでした。紐で縛って立体的に組み上がると感動しました。竹でこんなものができるとは思いませんでした。上手に設計されていてとても頑丈でした。テントを被せて完成しました。中に入ってみると広くてとても過ごしやすかったです。夜にライトアップしてみると綺麗に映えるなと思いました。初めてスタードームの存在を知り、作ってみて竹の新しい利用価値を見つけました。福岡 躍人



「スタードームは思った以上に広々とした空間で、災害の際などに利用できるのではないかという話に納得」

東乗鞍古墳での伐り出し作業はとても蚊が多くて大変でした。長袖長ズボンに軍手、帽子。虫よけスプレーもいっぱいかけて挑んだにもかかわらず、ありとあらゆるところをさされてしまいました。でも、群がってくる蚊を見ていると、竹林にいるのを実感しました。

竹の伐り出し作業は前回の間伐作業の要領でどんどん伐っていきました。コロナ関係でお休みしている受講生が多くいたため少人数での作業となりましたが、楽しく作業を行うことができたと思います。作業内容としては、伐り出しが一番楽で楽しかったです。竹割は6等分にする道具



を使って行いましたが、想像以上に腕の力が必要で、特に太い節に差し掛かると腕が悲鳴を上げてしまいました。もう少し男手があれば、と思ったりしましたが、来てくれていた子たちでどうにか必要な分の竹を割り終え、スタードームの試作を行う段まで持っていくことができました。正直この時点でだいぶ疲れていました。それでもスタードームの制作作業を教えてくださいました。それでもスタードームの制作作業を教えてくださいました。それでもスタードームの制作作業を教えてくださいました。

スタードームの試作は最終的な形が分かっていたらいい組み合わせが分かるので、それほど苦戦することもなかったです。あっという間に組み上げたスタードームは思った以上に広々とした空間で、災害の際などに利用できるのではないかという話に納得しました。空間自体もすごく素敵で、居心地も良いように感じました。この竹でのスタードーム作りの意味は、荒れた竹林の再生と余った竹の活用というところにあるようです。プラスチックにその役割をとって代わられるまでは、多くの場面で活用されていた竹。多くの人によって都合のいい場所に植えられたものの、プラスチックが出てくるとそのまま放置され、竹林は生え放題の無法地帯となってしまったと教えていただきました。こういった場所を変える一つの活動として、密集した竹林を間伐して、そこで伐り出された竹を利用して小学生や中学生たちとともにスタードームや瓦屋根の代わりとして利用したりしていらっしやることを知りました。楽しみつつ環境について学ぶ機会を作ってくださいていることになんたか有難いなあと感じました。私たち自身ももっともって日本の現状や人間の都合によって変わりつつある自然に目を向けていくべきだと思いました。山田 友見



山田 友見

8月27日 実習 スタードーム2日目



「次の世代に良い環境を残るためにどうするのかを考える義務があることを心から感じることができました」

この日はひと回り大きいスタードームの作成と地域の子もたちとのスタードーム作成を行いました。まず大きなスタードーム。これには、先に作ったドームにプラスして補強材としてのパーツをはめることになります。初めは平面でないと大きな枠組みができないので、平面で作っていきませんが、球を平面で組むと歪みが出てくることを、初めて体で感じることができました。(大きな例でゆうと地図なんかにも、そういった歪みを直す工夫があるのだろうかなど疑問を持つこともできました。) そうして出来上がった大きなスタードームはやはり圧巻。“災害時のシェルターにもなるよ”というインストラクターの方の言葉に、自然のものだけで釘を一切使わず雨風を凌げる施設を作れるのは素晴らしいなと感心しました。

地域の子もたちとの交流の中で、作成したスタードームは、すんなりと作り上げることができました。子どもたちにとってみると、あの空間は私たちより大きく見え、さまざまなことを感じてくれるのではないかと思います。

実際私もこの実習全てを通して、山(今回は古墳ですが。)で見上げていた竹から、このドームができるという経験はとても面白く、この実習のサブテーマでもあるSDGsの考え方を体で感じることができました。

私は山のジメジメ感や虫が“嫌い”です。この授業を受講しようと思ったきっかけは、今この授業を取らなかったら、この先一生関わることがないかもしれないと考えたからです。

全体を通して、実習では木を伐り出すことやスタードームの作成などから、利用可能な資源がいくらでもあることを学びました。それだけでなく座学で学んだ日本の森林状態の現状やそもそもの地理的なプレートのお話などは、いままで学んできた内容よりも深く、現実味のあるお話でとても関心を持つことができました。

また、今回のインストラクターの方々の本業は、ダイビング…つまり「海」の方々に



した。キレイな海を守るために森の整備を行う。すると、海がキレイになるというエピソードから、自然のつながりを感じたし、その自然の中にいる私たち人間は、次の世代に良い環境を残すためにどうするのかを考える義務があることを心から感じる事ができました。古川 雄大

「私たちは常に取捨選択をしながら生きている。少しでも正しい選択ができる、また錆び付いた刃物を蘇らせることができる、そんな大人でありたいと強く感じました」

「森に生きる」の実習の最終日。私たちは天理大学杣之内キャンパスの裏手の中庭のようなところにいました。大小のスタードームが二つ並び、幻想的な空間が生み出されていました。私たち自身が生み出した空間がそこにはありました。この日は私たち学生だけでなく天理市内に住む親子連れの方々も参加してくださり、みんなでスタードームを組み上げました。大きい方のスタードームには4mと5mの竹を組み合わせて9mの細長い竹を作り、それを使って組み上げました。小さいものを組み上げるときよりも支



えの竹が増え、組み立てもより複雑で難しくなりましたが、想像力を膨らませることができて逆に楽しかったです。

小さい方のスタードームですら複雑で子どもたちがその組み立て自体を楽しめたかと聞かれるとそこは疑問が残ります。それでも完成したスタードームでは中に入ったり出たり鬼ごっこをしたりと楽しんでくれていたようでした。彼ら彼女ら

からすると少し複雑すぎたかもしれません。また、なぜこのように竹を使って行っているのかといったことも理解できていないと思います。それでも心のどこかで輝く思い出の一部になっていてくれたらいいなあと思っています。そしていつか、あんなことをしたなあと思いだした時に、何をする活動だったのか考え、これからの日本の山々をはじめとする自然環境について少しでも考える機会になってくれたら嬉しいです。

スタードームを作り終わると最後に道具の手入れの方法を教えてくださいました。チェーンソーのごみをとり、刃を研ぐことは地道で根気のいる作業のように見えたのですが、それでも道具の手入れがその道具を生かしていると考え、とても重要な作業であると感じました。その作業を見ながら、ふと、今回の実習自体も道具のお手入れだったのではないか、と思いました。私たちが生きていくうえで必要な道具である山の木々や竹林。それらもほっとかされるとさび付いて使い物にならないどころか、邪魔者扱いされてしまうのです。

SDGs や ESD については何度も耳にしたことがあります。持続可能な開発目標や持続可能な開発のための教育には、未来の子どもたちに素敵な生活を送ってほしいという願いが込められているように思います。今、私たちがとっている行



動が、今後生まれてくる子どもたちの未来を奪ってしまうことも十分に考えられるからです。けれど、何が正しい行動であるのかさえ分からないこともあります。そんなときに少しでもやり方を教えてくれる方々がいるのは素晴らしいことだと思っています。今回の授業を通して、持続可能な開発とは何であるか改めて考える機会が多くありました。どの木を伐り出し、どの木を残すのか。私たちは常に取舍選択をしながら生きているのです。私自身、学ぶことを忘れず、少しでも正しい選択ができる、また錆び付いた刃物を蘇らせることができる、そんな大人でありたいと強く感じました。山田 友見

「森に生きるという実習でないと学べないことがたくさんあるのだと思いました」

この日は、小さな子供たちと一緒にドームを作る+子供たちにドームの作り方を教えてあげるということを課題に行いました。なかなか私が人見知りなところもあり、子供に話しかけたりは、できなかつたですが、初めに大学生と指導者の方と先生で作った大きいドームは、とても迫力がありました。確かにこの大きなドームがあれば震災などがあつた時にも対応ができると思いました。

次に、子供達とその保護者さん達が入つて、小さい方のスタードームは、なんと 20 分という速さでき、指導者の方もびっくりされており、前の時に一度やつていて、それが為になつたと思つました。またこの日は、大学のオープンキャンパスも開かれており、高校生の方も何人かお見えになり、少しでも森に生きるという「実習」授業に興味を持ってもらえたのかなと思つました。



最後に、全ての森に生きるの実習を通して、この実習では、他の学校ではなかなか体験などができない実際の林業体験や竹林に行つて伐つたりするといつた、実際に行つていふところができ、その点がこの実習のとてもいいところだと思つました。また、はじめての実習の時は龍王山に登り奈良県の山の出来方や地層のこと、植物や生物のことなどいろいろなことを学びました。これを通して、森に生きるという実習でないと学べないことがたくさんあるのだと思つました。また来年もこの実習を取りたいと思つました。次は、今の先輩のように次に入つてくる 1 年の人にしっかり教えられる先輩になりたいと思つました。枝松 春理

「竹のスタードームは、1 人では絶対に作れず、誰か、それも大勢の協力がないと完成しないものです」

私は、8 月 23 日の実習には参加できませんでしたが、今回のスタードーム作成で印象に残つたことは 3 つあります。1 つ目は、竹のしなやかさです。釘を使わないでテントのような物を作れることに驚きました。私は剣道をしていて、竹刀は竹を使つています。強く早く打撃をした時に、よく見ると、竹刀がしなつて曲がつています。竹の特性を考えて剣道では竹刀を使用したのではないかと思つました。つまり、剣道にとって竹

は重要な存在なんだとスタードーム作成時に実感しました。2つ目は、チームメイトとの団結力です。竹のスタードームは、1人では絶対に作れず、誰か、それも大勢の協力がなければ完成しないものです。実習に参加していた学生さん達や先生方、地域の方、そして子供たちと協力して作り上げることによって、スタードーム完成の達成感や団結力が深まったと思います。3つ目は、チェーンソーの手入れの仕方です。私は全くチェーンソーには興味がなかったので、ただ木を伐る機械だと思っていました。しかし、ただの機械ではとどまらず、チェーンソーを長く使っていくことによって起こるオイルの汚れやゴミ、刃が尖らなくなって木を伐れなくなってしまうことがあることを知りました。毎回丁寧に刃を研いで手入れをすることは大切なんだなと思いました。

今までの森に生きるの実習や事前研修では、私の知らない森のことがたくさん学べて、大学の授業では知ることのできない貴重な機会でした。次も取りたいなと思っています。
田村 千賀



Spielplatz

総合教育研究センター 箱田 徹

ベルリンは大小さまざまな公園があり、ゆっくり過ごすことができますが、なかでも小さい子向けの遊び場である Spielplatz をかなり頻繁に目にします。

日本の「児童公園」が、主に安全性の観点から遊具を撤去しているのとは対照的に、こちらではかなりさまざまな遊具が設置されています。なかにはこれ大丈夫？と思うようなレベルのものまでありますが、おおむね小学生までの子どもたちがたっぷり遊んで



います。

規模によって遊具の種類は異なりますが、日本のようなブランコや滑り台のほか、小さい子向けの水が出る大きな砂場（水は井戸のポンプのようなものから出す）、シーソー、ゴム製のベルトで飛び跳ねるもの、2階建てくらいの高さがある大型から小型までの「お城」、ロープを伝って渡るもの、ターザンごっこができるもの、などなどです。なお遊具は基本的に木製で頑丈です。

もちろんこうした場所には、大人が連れてくるので、大人の目はつねにあります。また、子どもが小さくてひとりではできない遊具については、大人と一緒にやったり手助けしたりはします。ただ「もっとやれ」「できる」というスタンスのもと、子どものチャレンジを促すのがふつうで、日本でよく聞こえるような「あぶない」という声はドイツ語では（他の言語では時々ある）ほとんど聞こえません。もちろん、小さい子には順番を守りなさいとか、他の子とぶつからないようにしなさい、といった指示はあります。他方で、大人が楽をするという意味もあるので、子どもたちに好きに遊ばせておいて、本人たちは電話しているとか、おしゃべりしているとか、本やスマホに目を落としていることも多いです。

高さ数メートルの遊具でも気にせず、かなり激しく遊んでいる子どもたちの姿を見ていくつかのことを思います。まず、日本の子どもが遊ばなくなった、体力が低下していると言われるのは、そもそも満足に遊ぶ場所が少ないからではないか、また大人が連れて行く時間が減っているからではないか、ということです。子どもが気軽に無料で楽しく遊べることをどれくらい重視するかは都市計画や政策の優先度の問題（自治体のお金を何に使うか）であり、それを支えるのは市民の意識です。

また、日本とドイツで小さいときからの身体を動かす基本的な習慣がこれだけ違うのであれば、日本が競技スポーツの強化に力を入れてもおのずと限界があるのではないかということです。たとえば、サッカーの強さにしても、単に体格や裾野の広がり、養成システムの問題だけではないだろうと勝手に思っています。

日頃の習慣といえば、ドイツでは老若男女がふだんからよく歩き、自転車にも乗ります。また主要なレジャーとして、お金のかからないハイキングがあり、ルートを整備も行われています（そのことと車社会であることは完璧に両立していますので、ドイツと日本では自然についての意識や利用法が違うということでしょう）。こうしたこともまた、小さいときからよく身体を動かすことの積み重ねであり、それを奨励する社会のしくみの反映であるように感じます。

日本でもスポーツをすることや健康であることが基本的な権利であるという考え方に注目が集まっているところです。権利というからにはすべての人が無料または安価に享受できるものでなければなりません。そのためのインフラストラクチャが、ハードウェアの面だけでなく、ソフトウェアの面でも、どういうものであるべきかについてもさまざまな議論が可能だと改めて思いました。



心の健康法 18

「変わること」を楽しんでいきましょう！

総合教育研究センター 仲 淳

2019年の年末に感染の拡大が始まってから丸3年。長引くコロナ対応生活で、今やマスクをするのは当たり前になってきてしまいました。街中で、「あれ？この人の顔はどこか変な気がするんだけど」と思って、よく見てみると、ただマスクをしていないだけ、ということがあったりして、繰り返される日常の営みの中で、「ふつう」というのは変わってきてしまうものなのだ、ということに気づかされます。

そして、この「慣れ」というのはおそろしいもので、なにごとにも慣れてくると、「いつも同じように」振る舞うようになってきて、そのうちに、「いつもの同じやり方でないと不安になってしまう」ということにもなってしまうがちです。

考え方でもなんでもそうなのですが、スタンダードができてしまうと、それから離れるのが少し怖くなってしまって、気がつく、生き方が固まってしまって、なんか息苦しい、ということが出てきてしまうこともあるのです。

そういうときにおススメなのが、いつもとちょっとちがうことをしてみる、ということです。ちょっと髪型を変えてみる、ちょっといつもとちがう色の服を買ってみる、ちょっとこれまで話しかけたことのない人に話しかけてみる、ちょっといつもと一本ちがう筋の道を行ってみる。。。すると、ちょっとなのですが、いつもとちがう風景が見えてきて、「あれ、こんな世界があったんだ！」となって、心が広がるものなのです。



「コーディネートは、こうでねいと！」ということで、わたしたちはどうしても「いつもの定番のあれで」という安定（決まった正解）を求めてしまうものなのですが、そういう生活の中に、ときどき小さな変化を取り入れてみると、日常にサッと新しい風が吹き込んで、気分が一転される、ということがあります。みなさんも「これは絶対にこうで！」「私のやり方はこうで！」と決めつけずに、まわりを見ていて、「なんか、あれいいな～」と思ったら、こっそりマネしたりしながら、いろんな小さな変化（スモールチェンジ）を楽しんでみてください！答え（生き方）は、いろいろ無数にあるのです！！

編集後記：ボリュームたっぷり16頁でお届けいたしましたCRADLE23号。なかなかいい物ができたのではないかと感じております。役員採用試験、現役合格したお二人、本当におめでとう！二年越しでやっとやる事ができたスタードーム！「森に生きる」のみなさん、お疲れ様でした！（杉）

CRADLE(クレードル) 第23号 2022年11月発行

発行者 上田 喜彦 天理大学 総合教育研究センター

編集 仲 淳 杉本 めぐみ

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 電話 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 株式会社 春日